

# 伎芸天

暁<sup>あかつきつき</sup>月の静謐に目覚める

この広大な一基の棺に

上弦の汀にさ迷う忘却

その背を見送る一滴<sup>しずく</sup>

昨夜<sup>よべ</sup>降りた露玉を渡る

煌びやかな銀河の沈黙に

渴いた水の記憶を辿る

修羅に咽<sup>まはだか</sup>ぶ真裸な夜の

円かなかの月の出に

ほの白い闇に香る水系

においやかな父母の死

その骸<sup>さきわ</sup>に幸<sup>さいわ</sup>う餓鬼の視

共<sup>まなこ</sup>どもの眼に刻まれる

碧落の面に沈く系譜は

み祖<sup>おや</sup>ら祝い祭る水焔に

美<sup>いづく</sup>し流れの末を招来し

照る月の虹に幻化する

光<sup>あわい</sup>の間に調べる天女の

口の辺に佇まう沈黙に

指先に結ぶ印を尋ねる

結ばぬ詞<sup>ことば</sup>に転ぶ六道へ


真直<sup>ますぐ</sup>に自らを踏み出す

み歩み立たす今一差し

この測れぬ間にゆらく

わたくし<sup>の</sup>玉の緒解く

水の容は生まれぬ先祖  
幽明の汽水域に啓ける  
奥処も知れず頻く瑜伽  
ただその音のみ懐しく  
見合わせ訪ねる先の夢  
一つ二を結び一となる  
玉むす露の昨夜の光儀  
充溢する落下に浮かぶ  
この開け初める無間の曙  
閉ざされていく露玉に  
肌透く月の母差す際の  
後の汀に洗われる倂  
化粧し面に開く鏡なす  
水を托す内奥の眼差し  
再生の序へ鎮め祭られ  
逆様に眠り続ける死児  
その波状の葬列を送る  
暁星の見開かれた眼に  
未だしわたくしを問う  
透徹した祥に尽を聞く  
真白に祖ら玉敷く穹に  
天衣炎上し雲狂おすに  
飛火なし贄立つ餓鬼ら  
随喜紅蓮し立てる涅槃  
焰燃り織り成す曼荼羅  
新たし煌びやかな碧落  
その際に白波立ち立つ  
月の知らず満ち干の海へ  
におい立つわたくしの  
送りを鑽仰する餓鬼ら



屠る（ないわたくしの）  
序に続く尽きぬ諧調に

# 蕪島

波濤に揉まれる白銀の喚喜  
うみねこは海の群青に塗れ

背黒に染まる波頭の際の色  
沸き立つ波間の銀鱗を追う

いたこの口寄せに狂う潮騒  
逆巻く波の記憶に立ち上る

鯨の光儀 そして飢餓の視  
屠られる神の屍肉に群がる

何れの夜より流れ着く定と  
忌み流された 蛭子の末か

浜を満たす 追われた者ら  
千年の呪詛を突く 銛の鋒

尸を洗う白波を屍衣と纏い  
鎮もる岩島に咲く蕪の花叢

幼い者ら生くと死ぬの波間  
海潮に刻まれた命脈の凝視

海は流れ浜は返す遠祖の波  
海は返し浜に轟く怨嗟の調